

財団からのお知らせ

財団主導型研究事業について

今年度から新たに財団主導型研究事業を始めました。これまでの財団の事業は、研修事業や推進事業などの委託事業や学会や個人研究の助成事業のみでした。今回、それらに加えて、財団が主体的に取り組む研究事業を始めた次第です。この事業はいわゆる医師主導型研究事業と同じで医師のところを財団におきかえたものです。

財団主導型研究では財団理事が主任研究者となり、精神分野、神経分野、筋疾患分野、発達障害分野、精神保健分野等の領域に関する研究を行うものです。テーマを選定する際には、その研究成果が、臨床にきわめて有用で、また広く応用できるものであることを条件とします。原則多施設共同の班研究の形で行います。研究にかかる費用は企業からの寄附によって賄います。

この研究の全ての過程では、公平性と透明性を保ちます。すなわち、特定の企業に利するものではなく、また研究の全プロセスをできるだけ公開します。その成果は広く社会のものです。ですから全ての企業、研究者は一定のルールのもとで、それを利用することが可能です。このような研究を行なうことが、まさに公益法人の役割だと考えられます。

◆ 具体的テーマについて

今年度行なう財団主導型研究事業では、統合失調症等の認知機能評価尺度として外国で開発されたバッテリーの標準化を取り上げました。すでに外国で使用されているそれらのバッテリーを、わが国でも使用できるように標準化しようというものです。このようなテーマを選んだ理由は、統合失調症の患者さんの社会復帰を阻む要因として、認知機能障害があるためです。この機能障害を適切に評価し、認知機能を高めることにより、社会復帰を促進する一助としたいと考えたからです。具体的には、アメリカで開発された MATRICS Consensus Cognitive Battery (MCCB) の標準化と、オーストラリアで開発された CogState Schizophrenia Battery (CSB) のバリデーション研究です。

◆ MCCB の標準化研究

MATRICES は統合失調症の中核的特徴である認知機能障害を改善する薬剤の開発を支援する目的で米国 NIMH / NIH が主導して開発している認知機能バッテリーです。統合失調症の治療薬剤開発を国際共同治験として行う必要性から、英語以外の版が開発されており、2009 年までに中国語版、ドイツ語版、ロシア語版、ヒンディ語版、スペイン語版などの翻訳作業が行われています。

MCCB の日本語版を標準化することを目的とした本研究では、全国の 15 の専門施設の参加を得て、研究班を組織し、日本語に翻訳された MCCB を用いて、健常者群の検査を実施し、検査結果を解析し標準化作業を行います。さらに将来的には本研究成果はわが国の治験等での標準的検査法となるか否かを検討します。

対象は健常成人とし、20～60 歳代まで各 10 年代ごとに男女各 30 名（総計約 300 名）を用いた標準化です。検査には MCCB の日本語版を使用します。この認知機能検査は、7つの認知機能ドメインを評価する 10 のテストから構成されています。評価者間でのばらつきを極力少なくするように、評価者のトレーニングを綿密に行ないます。そのために二人の評価者がアメリカに行き、指導をうけてきました。2009 年 10 月スタートで 2011 年 3 月までの予定です。

◆ CogState バッテリーのバリデーション研究

統合失調症等の認知機能評価尺度としてオーストラリアで開発された CSB の日本語版を用い、その有用性を評価することが目的です。この分野の研究に実績のある 5つの専門施設の参加を得て、研究班を組織して行います。統合失調症患者および健常者それぞれ 40 名に対して CSB を用いて認知機能を測定し、健常者群と患者群との差を確認するとともに、得られた成績を海外での結果及び BACS のデータと比較します。

対象は DSM-IV-TR にて統合失調症と診断された患者および精神疾患に罹患していない健常者、各群 40 名です。CSB はパソコンを用いた認知機能検査バッテリーで、7つのタスクからなり、トランプカードを使ったゲーム感覚のタスク、迷路の追跡、単語の聴覚記憶、および表情認識などが含まれます。1回の検査は 30分～40分で実施できるという簡便さが特徴的です。2009 年 9 月スタートで 2010 年 12 月までの予定です。

理事長 高橋 清久

I 平成22年度調査研究助成金候補者募集

【対象となる研究】

精神・神経疾患等に関する基礎的、臨床的調査研究及び精神保健に関する調査研究

【対象となる研究分野】

精神疾患、神経疾患、筋疾患、精神・神経領域発達障害、精神保健

【助成額】 50万円～100万円/件

【採用件数】 5件まで

【締切日】 平成21年12月31日

II 平成22年度研究集会等助成金候補者募集

【対象となる研究集会等】

精神・神経疾患等に関する研究集会等のうち、国内において開催される講習会、講演会を対象とする。但し、学会は除く。

【対象となる研究分野】

精神疾患、神経疾患、筋疾患、精神・神経領域発達障害、精神保健

【助成額】 30万円～100万円/件

【採用件数】 7件まで

【締切日】 平成21年12月31日

財団は従来から若手研究者への調査研究・集会等の助成を行っています。平成22年度の募集は上記の要領で行います。

応募資格、申込方法等詳細につきましては、財団ホームページをご覧ください

URL<http://www.jfnm.or.jp>



平成20年度 調査研究助成金採択者研究報告

精神科医療における行動制限の実情調査および最適化に向けた取り組みに関する検討

主任研究者：館農 勝

研究協力者：上原 久美、佐藤 創一郎、杉浦 寛奈、高橋 英彦、趙 岳人、
橋本 直樹、藤澤 大介

研究成果のまとめ

- ① 日本の若手精神科医を対象に、行動制限や急性期初期治療に関する意識調査を行った
- ② 国内外の実情を調査した上で国際ワークショップを開催し、行動制限の最適化に向けて議論した
- ③ 先行研究や国内外のエキスパートから情報を得て、行動制限の減少に向けた方策を議論した

はじめに：隔離や身体拘束といった行動制限は、精神科急性期治療の現場では必要な治療手段の一つといえる。人権擁護の立場から、その廃絶を訴える声も聞かれるが、避けられないのが現実である。しかし、行動制限について考え・学ぶ機会は極めて限られている。今回、行動制限に関するワークショップや意識調査を行った。

方法：急性期統合失調症のケースシナリオを作成し、2008年10月に、第13回環太平洋精神科医会議東京大会に先立ち開催された「若手精神科医の学術的向上へのフェローシッププログラム (FPADP)」の参加者を中心とした国際調査 (n=42)、および、主に若手精神科医を対象とした国内調査 (n=183) を施行した。先行研究を参考に、急性期治療や行動制限への考え方等について尋ねた。

成果：国際ワークショップでは、国により行動制限に関連した法の整備にばらつきが大きい事が示された。海外の参加者からは、行動制限を減らすために家族の役割を重視する声が多く聞かれた。我が国では、隔離は身体拘束

よりも人道的との考えが強く、我が国に特有の意識とも考えられた。興奮を伴う急性期症例への初期対応として、従来のハロペリドール注射液の使用から、より患者の自主性を重視した、非定型抗精神病薬経口投与が選択される機会が増えている事が示唆された。また、高用量の薬剤による鎮静よりも、身体拘束の方が安全であると考えられる傾向が認められた。

考察：精神科臨床の現場で、しばしば直面するにも関わらず、行動制限について考え・学ぶ機会は極めて限られている。今回、若手精神科医が行動制限班を立ち上げ、ワークショップや意識調査などの活動を通じ、精神科医療における非自発的治療について議論したが、このような機会を得られたことは大変有意義であった。行動制限の最適化に向けては、各個人がその意識を強く持って患者に接し、実行可能な事から着手する事が重要であると改めて認識した。このような貴重な機会を与えていただいた財団法人精神・神経科学振興財団に深謝致します。

引用文献：

- 1) Tateno M, Sugiura K, Uehara K et al., Attitude of young psychiatrists toward coercive measures in psychiatry: a case vignette study in Japan. Int J Ment Health Syst. 2009; 3: 20.
- 2) 館農勝, JYPO 行動制限班. 急性期統合失調症に対する初期治療と行動制限について～若手精神科医を対象とした調査から～精神経誌 (印刷中)
- 3) 橋本直樹, JYPO 行動制限班. Acute psychosis に対する非自発的治療について～国際ワークショップでのアンケート調査から～精神経誌 (印刷中)
- 4) 趙岳人. 長期隔離解消のための工夫. 精神経誌 (印刷中)
- 5) 佐藤創一郎. 行動制限を最小化するための課題. 精神経誌 (印刷中)

ショウジョウバエの遺伝子プールを用いた新規自閉症関連遺伝子の探索

主任研究者：須田史朗

研究協力者：岩田圭子、中村和彦、

アニータピライ、松崎秀夫、岩田泰秀、森則夫

研究成果のまとめ

- ショウジョウバエの神経発達関連遺伝子データベースをもとにセロトニン神経系との関連が深い遺伝子を自閉症の原因候補遺伝子として抽出した。
- 候補遺伝子の発現変化をリアルタイム PCR により検討したところ、自閉症脳では ephrin-B3、plexin A4、roundabout 2 などの軸索ガイダンス蛋白遺伝子の mRNA 発現が低下していることが観察された。
- roundabout 2 に関し、自閉症者 DNA トリオサンプルを用いて関連解析を行ったところ、疾患のリスクと関連する遺伝子多型が発見された。
- 今回の研究ではショウジョウバエの遺伝子データベースを参照して候補遺伝子の抽出を行ったが、結果として高い確立で発現量に差のある遺伝子を検出することが可能であった。従って、本法は新しいスクリーニング法として有望であることが示唆された。

はじめに：自閉症では神経発達関連遺伝子の異常が存在していることが想定されるが、未だ原因遺伝子は同定されていない。一方、近年の当研究室の成果から自閉症では脳内セロトニントランスポーター密度が広汎に低下していることが明らかとなった。従って、自閉症の候補遺伝子はセロトニンに関連する遺伝子であると想定される。

方法：ショウジョウバエの神経発達関連遺伝子群のデータからヒトホモログを抽出し、セロトニンに關係する新規候補遺伝子を選定した。それらの発現変化を自閉症死後脳サンプルを用いたリアルタイム PCR により検討し、関連解析により疾患のリスクと関連する遺伝子多型の有無を検索した。

成果：自閉症脳では、ephrin-B3、plexin A4、roundabout 2 などの軸索ガイダンス蛋白遺伝子の mRNA 発現が対照群と比較し変化していることが観察された。roundabout 2 に関し、自閉症者 DNA トリオサンプルを用いて伝達不均衡テスト (TDT) による関連解析を行ったところ疾患のリスクと関連する遺伝子多型が発見された。

考察：自閉症では軸索ガイダンス蛋白群の低下が観察されており、これらの変化が自閉症の病態基盤を形成している可能性が示唆された。今回の研究ではショウジョウバエの神経発達関連遺伝子を参照し候補遺伝子の抽出を行ったが、結果として高い確立で発現量に有意な差のある遺伝子を検出することが可能であり、スクリーニング法として有望であることが示唆された。

引用文献：Koizumi K, Higashida H, Yoo S et al. RNA interference screen to identify genes required for Drosophila embryonic nervous system development. Proc Natl Acad Sci U S A 2007, 104:5626-31

発表論文：Anitha A, Nakamura K, Yamada K et al. Genetic analyses of Roundabout (ROBO) axon guidance receptors in autism. Am J Med Genet B Neuropsychiatr Genet 2008, 147B:1019-1027

学会発表：Suda S, Iwata K, Anitha A et al. Serotonin transporter and serotonin related gene expression in autism. Neuroscience 2008, Washington, DC, USA, November 2008

神経軸索変性のシグナル関連分子の網羅的解析

主任研究者：若月修二

研究協力者：荒木敏之

研究成果のまとめ

- ・リン酸化酵素阻害剤を対象にしたスクリーニングにより、*in vitro* ワーラー変性を阻害する化合物を7種同定した。
- ・微小管の重合・脱重合を制御するタンパク質リン酸化酵素が神経軸索を変性から保護する可能性を示した。

はじめに：神経変性疾患を含む多くの脳神経疾患において、神経軸索変性は神経細胞死の前段階として観察される。これまで、神経細胞死を対象とした調査研究が精力的に実施されてきたが、神経細胞死は病態後期に観察される不可逆なプロセスであることから、神経軸索変性を抑制、あるいは大幅に遅延させる方法の開発は治療、病態の改善に向けた標的として有効である可能性が高い。一方、神経軸索変性はタンパク質リン酸化酵素など、多様な酵素反応を伴う能動的なプロセスであるが、その分子メカニズムの詳細については明らかではない。本研究では、神経軸索変性の分子メカニズムを解明することにより、神経変性疾患の治療法の開発に繋げることを目的とした。

方法：本研究では、神経軸索変性に直接的に関与するリン酸化シグナル伝達経路を明らかにするため、後根神経節神経細胞を用いた *in vitro* ワーラー変性モデルを評価系として、リン酸化酵素阻害剤の神経軸索変性に与える影響を指標にしたスクリーニングによりリン酸化酵素の同定を行った。

成果：32種のタンパク質リン酸化酵素、3種の脂質リン酸化酵素を標的とする約160種のリン酸化酵素阻害剤を対象にしたスクリーニングにより *in vitro* ワーラー変性を阻害する化合物を7種同定し、そのうちのひとつは微小管の重合・脱重合の制御に関与するタンパク質リン酸化酵素を特異的に阻害する低分子化合物であった。

考察：神経軸索変性は、神経軸索の刈り込みや傷害後変性など、さまざまな局面で観察される選択的な軸索消失過程であり、近年まで神経軸索変性はアポトーシスと共通したメカニズムによって進行すると考えられてきた。本研究で得られた知見はタンパク質リン酸化酵素を介した細胞骨格系の制御が神経軸索変性の進行に関与することを示しており、神経軸索変性における軸索自律的なメカニズムの存在を強く示唆した。本研究により同定された阻害剤を用いて、今後は個々のシグナル伝達経路間のクロストークについて調査し、神経軸索変性の分子メカニズムの全貌を明らかにしたい。

学会発表

若月修二，荒木敏之

神経軸索変性の分子メカニズム．第31回日本分子生物学会年会・第81回日本生化学会大会合同年会シンポジウム「中枢神経細胞の再生と変性のメカニズム」2008年12月9日 神戸

アスペルガー障害における社会性の障害とそのオキシトシン投与による治療の脳基盤解明

主任研究者：山末 英典

研究協力者：阿部 修、八幡憲明、井上秀之、高野洋輔、管心、川久保友紀、
桑原斉、金生由紀子、笠井清登

研究成果のまとめ

研究 1. 高機能広汎性発達障害当事者では下前頭回灰白質体積が健常対照よりも有意に小さかった。さらに、右半球の後部下前頭回体積が小さいほど、社会コミュニケーションの障害が有意に重いという相関を認めた。

研究 2. 健常成人女性では協調性も総灰白質／頭蓋内容積比も男性よりも有意に高かった。そして、この総灰白質／頭蓋内容積比が大きいほど協調性が高いという相関が認められた。さらに局所では、前頭葉や側頭葉を中心に、女性の方が有意に体積が大きい部位が認められ、左半球の内側前方前頭前野、両側の後部下前頭回から腹側中心前回にかけての領域、左の紡錘状回については、協調性が高いほど体積も大きいという相関を認めた。

(文献 2)

研究 3. 自閉症のリスクとされるオキシトシン受容体遺伝子多型を持つ個体ほど、前部帯状皮質と右半球の上側頭溝後部の体積が小さかった。さらに女性で特異的に、この多型が少ないほど扁桃体や後部下前頭回体積が大きかった。

はじめに：オキシトシンは、これまでも実験動物において、愛着行動などに関与する事が知られてきていた。さらに近年ヒトでも、オキシトシン投与による健常成人での対人交渉能力や他者の意図を読み取る能力の向上が報告された。また、オキシトシン受容体遺伝子多型が自閉症と有意に関連するという報告が相次いだ (文献 1 で概説)。

これらのことから、オキシトシンの、自閉症、特にその中でも社会性の障害への病態上または病因上の関与や、治療薬としての可能性が注目されてきている。本研究では、アスペルガー症候群などの広汎性発達障害にみられる社会性の障害の脳基盤解明に迫るために、脳形態学的 MRI 解析を用いた研究を行なった。そしてさらに、社会性の障害、およびその脳基盤が、男女差やオキシトシンとどのように関連するかについても検討した。

方法：研究 1：14 名の高機能広汎性発達障害当事者と、健常対照として、右利きで年齢、両親の社会経済背景、および知能指数に当事者群と差がない成人男性 11 名を募集した。全例に MRI 検査を行い、用手的に関心領域の体積測定を行った。関心領域の境界は、脳溝パターンの個体差を考慮した上で脳回単位で定義した。

研究 2：20 歳代と 30 歳代で精神神経疾患の既往がなく、右利きの 89 名の男性と 66 名の女性を対象に、240 項目版の Temperament and Character Inventory (TCI) の協調性 (Cooperativeness) 得点を行動指標として用いた。MRI 画像は、Optimized Voxel based morphometry を行い、全脳を細かな画素の単位で画像統計解析を行った。(文献 2)

研究 3：関連解析によって自閉症との有意な関連が報告されたオキシトシン受容体遺伝子多型 rs2254298 A allele と、20 歳代から 30 歳代の健常成人 180 名 (男性 121 名、女性 59 名) における脳形態との関連を Optimized Voxel based morphometry を用いて検討した。

成果：研究 1：当事者群では、頭蓋内容積の個体差を補正した上で、左右両側の後部及び前部下前頭回灰白質体積が健常対照よりも有意に小さかった。しかし、頭蓋内容積、総灰白質体積、総白質体積、総脳脊髄液容積に両群の差を認めなかった。さらに、右半球の後部下前頭回体積が小さいほど、社会コミュニケーションの障害が有意に重いという相関を認めた ($\rho = -0.71, p = 0.009$)。

研究 2：女性では協調性の得点が高いと、また総灰白質／頭蓋内容積比が有意に大きかった。そして、この総灰白質／頭蓋内容積比が大きいほど協調性が高いという相関も、女性では有意に認められた。さらに局所では、前頭葉や側頭葉を中心に、女性の方が有意に体積が大きい結果が様々な部位で認められた。そして女性が男性よりも大きい部位の中で、左半球の内側前方前頭前野、両側の後部下前頭回から腹側中心前回にかけての領域、左の紡錘状回については、協調性が高いほど体積も大きいという相関を有意に認めた。(文献 2)

研究 3：rs2254298 A allele を多く持つ個体ほど、前部帯状皮質と右半球の上側頭溝後部の体積が小さかった。さらに、男性では認めずに女性で特異的な相関として、この allele が少ないほど扁桃体や後部下前頭回の体積が大き

かった。

考察：本研究成果から、女性でより強く働き、そしてブロードマン 44 野のように社会コミュニケーションや協調性に関連し、女性でより大きい部位の脳体積に関わる、オキシトシンのような物質は、ブロードマン 44 野の男女差、さらにはアスペルガー障害の男女差やブロードマン 44 野の発達不全に関連しうり、さらには同疾患の社会性の障害の基盤を成しうることが示唆された。

オキシトシン投与による社会性の改善の脳基盤としてブロードマン 44 野のような領域の発達不全や機能不全が存在することが示唆された。

引用文献（発表論文）：1) Yamasue H, Kuwabara H, Kawakubo Y et al. Oxytocin, Sexually-dimorphic feature of social brain, and Autism. Psychiatry Clin Neurosci 63:129-140, 2009.

2) Yamasue H, Abe O, Suga M et al. Sex-Linked neuroanatomical basis of human altruistic cooperativeness. Cerebral Cortex 18: 2331-2340, 2008.

学会発表：1) “Neural basis of social dysfunction in autism-spectrum disorder”, Symposia “Advances in Psychiatric Neuroimaging”, 13th PRCP, 年 10 月 31 日, Tokyo

2) “Neuroimage of autism:Neural basis of oxytocin”, Symposium “The possible role of Oxytocin as a key molecule in the new treatment and in the pathogenesis of autism-spectrum disorder”, 10 th WFSBP Congress, Paris, France, June, 28, 2009

耳鼻咽喉科外来における精神疾患患者の診断治療

主任研究者：五島史行

研究協力者：中井貴美子、藤野紀子、岡 瑞紀、矢部はる奈

研究成果のまとめ

- 1 神経疾患として認知度の低いむずむず脚症候群について認知度のアンケート調査を行った。
- 2 新しい知見として耳鼻科におけるうつ病患者の鼓膜所見の特徴について報告した。
- 3 耳鼻科における線維筋痛症の診断治療について検討を行った。

(A) むずむず脚症候群について認知度のアンケート調査

【要 旨】本疾患の本邦での診断治療の実際について検討することを目的とし、42 名の医師にアンケート調査を行った。結果は、病名の認知度（69.0%）、診断基準の認識度（7.1%）と低かった。クロナゼパムを含めたベンゾジアゼピン系睡眠剤の処方率が高かった。本疾患は的確な問診によって診断は可能であり、慢性疾患ではあるが治療により症状は劇的に改善する。人工透析、鉄欠乏など二次性に生じることが多いため、原疾患の治療に当たる各科医師が本疾患の存在を念頭に置いて診療に当たることは患者への利益に繋がる。啓蒙が急務と思われた。

【方法】平成 18 年 11 月～12 月の間に総合病院（300 床以上）に勤務する精神科、内科、外科など計 42 名の医師（精神科 12 名、内科 6 名、外科 5 名、整形外科、小児科、泌尿器科が各 3 名、耳鼻咽喉科、脳外科、皮膚科、放射線科、産婦人科が各 2 名）を対象にアンケート調査を行った。

【結果】全例から回答を得た。RLS の名称の認知度は、全体で 29 / 42 人（69.0%）であった。精神科医：12 / 12 人（100%）、他科：17 / 30 人（56.7%）。RLS 以外の名称として認知されていた病名は下肢静止不能症候群であった。

【考察】アンケートの結果 RLS の認知度は 69.0%と決して高くなかった。不眠患者を診察する頻度が最も高い精神科医でも 83.3%、他科医では 50%という治療経験であった。主要な 4 項目の診断基準について知っていると言った医師は 7.1%にすぎなかったが、身体科医は病気自体をまったく知らないと言っていた。精神科医は正確には診断基準を述べられなかったがほぼ診断基準を満たす認識を持っていた。自身の専門分野に該当する疾患に当てはめて診断治療をしている傾向がみられた。

本アンケートでも精神科医は本疾患を自身が治療すべきという認識を持っていた。実際には睡眠障害が主訴となる

割合が高いので治療の中心は精神科・睡眠クリニック等でよいだろう。しかし、他科医が患者の訴えを汲み取り、治療に繋げられるようするためには本疾患を認知することは必要である。そして治療を担当するものは治療法の熟知が必要である。

睡眠は人生の3分の1を占める重要な生活習慣であり、RLSによる睡眠障害は生活の質を著しく低下させる。本疾患を早期に正確に診断し治療を行うためには、今回のアンケート結果を踏まえ、医療者に対する啓蒙活動が急務である。

(B) うつ病患者の鼓膜所見

耳鼻咽喉科には耳鳴り、めまい、咽喉頭異常感症などの身体症状を訴える患者が多く受診する。この中にはうつ病の身体症状としてこれらの身体症状が出現している症例が含まれている。拡大耳鏡にて鼓膜を注意深く観察すると、片側または両側の鼓膜タッチ骨柄動脈、lamina vasculosaの怒張を認めることが確認された。これらの所見は自律神経失調状態の結果、血管拡張を来したという仮説を立て現在さらに検討を行っている。

(C) 耳鼻科における線維筋痛症の診断治療

紙面の都合で論文要旨をしめす。詳細は五島史行、中井貴美子：耳鼻咽喉科における線維筋痛症、筋痛症の診断治療 心療内科 13 (1)16-20.2009を参照のこと。

【方法】 当科で治療中のFMS、筋痛症について経過、治療などについて検討を行った。

【結果】 治療にはSSRI,SNRI(Serotonin Noradrenalin Reuptake Inhibitors), 抗不安薬、抗けいれん薬、漢方薬などが用いられていた。筋痛症では筋痛は一時的であり消失することが多かった。FMSでは症状は改善する例が多いが、消失することはなかった。めまい、耳鳴りを主訴としたものが9例あった。過半数で抑うつ傾向を認めた。臨床心理士によるカウンセリングはほぼ全例で行っていた。

本研究費による主な業績

論文

1 岡 瑞紀、五島史行：むずむず脚症候群の認知度についてのアンケート調査 日本心療内科学会誌 12(3) P159-164.2008

学会発表

1 第104回 日本精神神経学会総会平成20年5月29日 東京ホテルパシフィックメリディアンうつ病患者の鼓膜所見の特徴 耳鼻咽喉科外来における検討

五島史行、岡 瑞紀

2 第49回日本心身医学会 札幌コンベンションセンター 北海道 平成20年6月12日13日

耳鼻咽喉科における線維筋痛症の治療

五島史行、中井貴美子、村上正人

3 第70回日本耳鼻咽喉科臨床学会 平成20年6月28日 長崎ブリックホール

耳鼻咽喉科におけるSSRI(塩酸パロキセチン、マレイン酸フルボキサミン)の比較

日野市立病院 耳鼻咽喉科 五島史行

平成21年度 研究集会助成金採択者セミナー報告

◇ 第40.41回 国立精神・神経センター 夏の筋病理セミナー



筋病理セミナーの講義風景



セミナーの参加者

開催会場	国立精神・神経センター神経研究所 疾病研究第一部および 国立精神・神経センター病院 DNA 診断・治療室
開催期日	(第 38 回) 平成 21 年 7 月 27 日 (月) ～平成 21 年 7 月 31 日 (金) (第 39 回) 平成 21 年 8 月 24 日 (月) ～平成 21 年 8 月 28 日 (金)
講師(演者)の氏名、 所属機関名及び職名	西野一三(国立精神・神経センター神経研究所 疾病研究第一部長) 埜中征哉(国立精神・神経センター病院 名誉院長) 後藤雄一(国立精神・神経センター神経研究所 疾病研究第二部長) 大矢 寧(国立精神・神経センター病院 神経内科医長)
参加者の職種、 および参加員数等	全国の若手神経内科医および小児神経科医。 各回 11 名、総勢 22 名
得られた成果	筋生検の方法、筋生検検体の固定・保存・運搬方法、切片作製・染色方法を学んだ後、実際に固定・切片作製・染色の実習を行い、各自で、筋生検検体の処理が行えるようになった。また、実際に筋病理標本が各自に割り当て、所見を付ける実習を行って、病理標本の読み方の基本を習得した。さらに、筋ジストロフィー・先天性ミオパチー等の筋疾患についての講義を受け、筋疾患についての基本的な知識を習得した。終始活気に溢れ、参加者からは、とても役に立ったとのコメントを多く頂いた。

◇ 国立精神・神経センター小児神経セミナー



講義風景

熱心に聴講する参加者



開催会場	国立精神・神経センターコスモホール
開催期日	平成 21 年 7 月 23 日 (木) ～平成 21 年 7 月 25 日 (土)
講師(演者)の氏名、 所属機関名及び職名	埜中征哉(国立精神・神経センター病院 名誉院長) 後藤雄一(国立精神・神経センター神経研究所部長) 稲垣真澄(国立精神・神経センター精神保健研究所部長) 大槻泰介(国立精神・神経センター病院部長) 須貝研司(国立精神・神経センター病院医長) 中川栄二(国立精神・神経センター病院医長) 斎藤義朗(国立精神・神経センター病院医長) 小牧宏文(国立精神・神経センター病院医師) 佐久間 啓(国立精神・神経センター病院医師) 佐々木征行(国立精神・神経センター病院部長)
参加者の職種、 および参加員数等	小児科医師 40 名
得られた成果	若手の小児科医師に、小児神経学に関する多くの情報を伝えた。基本的な診断・治療に関する知識を中心に講習形式で行った。参加者がそれぞれの地域・一般病院・大学病院などでの一般臨床の中で、小児神経学の実践に役立てることができると期待できる。参加者から、今後さらに専門性を身につけるために当センターにおいてレジデント等での研修を希望したいという意見が多く寄せられた。